

# 多段階 let 挿入を行うコード生成言語の 設計

大石純平

筑波大学 大学院  
プログラム論理研究室

2016/7/12

# アウトライン

- ① 概要
- ② 研究の背景
- ③ 研究の目的
- ④ 研究の内容
- ⑤ まとめと今後の課題

# アウトライン

- ① 概要
- ② 研究の背景
- ③ 研究の目的
- ④ 研究の内容
- ⑤ まとめと今後の課題

プログラムを生成するプログラミング言語 (=コード生成言語)  
の安全性を保証する研究

プログラムを生成するプログラミング言語 (=コード生成言語)  
の安全性を保証する研究

- 効率的なコードの生成

プログラムを生成するプログラミング言語 (= **コード生成言語**)  
の安全性を保証する研究

- 効率的なコードの生成
- 安全性の保証

プログラムを生成するプログラミング言語 (=コード生成言語)  
の安全性を保証する研究

- 効率的なコードの生成
- 安全性の保証

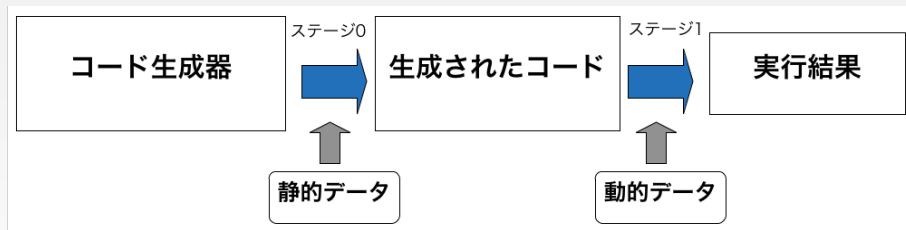
⇒ 多段階 let 挿入を安全に扱うための型システムを構築

# アウトライン

- ① 概要
- ② 研究の背景**
- ③ 研究の目的
- ④ 研究の内容
- ⑤ まとめと今後の課題



# 段階的計算 (Staged Computation)



- コード生成ステージとコード実行ステージ
- ⇒ 段階的計算をサポートするプログラム言語 ⇒ コード生成言語

# power 関数のコード化

<code>power</code>	$x$	$n$	$=$	$x$	<code>if</code>	$n = 1$
	$x * \text{power}$	$x$		$(n - 1)$	<code>if</code>	$n > 1$

# power 関数のコード化

$\text{power } x \ n = x$	if $n = 1$
$x * \text{power } x \ (n - 1)$	if $n > 1$

$n = 8$  に特化したコードの生成を行う

$\text{gen\_power } x \ 8 = x * x * x * x * x * x * x * x$

# power 関数のコード化

$\text{power } x \ n = x$	if $n = 1$
$x * \text{power } x \ (n - 1)$	if $n > 1$

$n = 8$  に特化したコードの生成を行う

$\text{gen\_power } x \ 8 = x * x * x * x * x * x * x * x$

$\text{gen\_power } x \ 8$  は  $\text{power } x \ 8$  より高速

- 関数呼び出しがない
- 条件式がない

# コード生成の利点と課題

## 利点

- 「保守性・再利用性の高さ」と「実行性能の高さ」の両立

# コード生成の利点と課題

## 利点

- 「保守性・再利用性の高さ」と「実行性能の高さ」の両立

## 課題

- パラメータに応じて、非常に多数のコードが生成される
- 生成したコードのデバッグが容易ではない

⇒ コード生成の前に安全性を保証したい

- コード生成プログラムが、安全なコードのみを生成する事を静的に保証
- 安全なコード: 構文, 型, 変数束縛が正しいプログラム

- コード生成プログラムが、安全なコードのみを生成する事を静的に保証
- 安全なコード: 構文, 型, 変数束縛が正しいプログラム

しかし **多段階 let 挿入** 等を実現する **計算エフェクト** を含む場合のコード生成の安全性保証は研究途上



# 多段階 let 挿入

- 入れ子になった for ループなどを飛び越えたコード移動を許す仕組み
- ループ不変式の移動によって、効率的なコード生成に必要なプログラミング技法

## 多段階 let 挿入, let 挿入の例

```
for  $i = 0$  to  $n$  in  
  for  $j = 0$  to  $m$  in  
    let  $y = t$  in  
       $a[i][j] = b[i] + y$ 
```

# 多段階 let 挿入, let 挿入の例

```
for  $i = 0$  to  $n$  in  
  for  $j = 0$  to  $m$  in  
    let  $y = t$  in  
       $a[i][j] = b[i] + y$ 
```

多段階 let 挿入



```
let  $y = t$  in  
  for  $i = 0$  to  $n$  in  
    for  $j = 0$  to  $m$  in  
       $a[i][j] = b[i] + y$ 
```

—  $t$  が  $i$  にも  $j$  にも依存しない式

# 多段階 let 挿入, let 挿入の例

```
for  $i = 0$  to  $n$  in  
  for  $j = 0$  to  $m$  in  
    let  $y = t$  in  
       $a[i][j] = b[i] + y$ 
```

普通の let 挿入



```
for  $i = 0$  to  $n$  in  
  let  $y = t$  in  
    for  $j = 0$  to  $m$  in  
       $a[i][j] = b[i] + y$ 
```

—  $t$  が  $i$  にのみ依存し  $j$  には依存しない式

## 多段階 let 挿入, let 挿入の例

```
for  $i = 0$  to  $n$  in  
  for  $j = 0$  to  $m$  in  
    let  $y = t$  in  
       $a[i][j] = b[i] + y$ 
```

多段階 let 挿入でも let 挿入でもない



```
for  $i = 0$  to  $n$  in  
  for  $j = 0$  to  $m$  in  
    let  $y = t$  in  
       $a[i][j] = b[i] + y$ 
```

—  $t$  が  $i, j$  に依存した式

## プログラミング言語におけるプログラムを制御するプリミティブ

- exception (例外): C++, Java, ML
- call/cc (第一級継続): Scheme, SML/NJ
- shift/reset (限定継続): Racket, Scala, OCaml
  - 1989 年以降多数研究がある
  - コード生成における let 挿入が実現可能
- shift0/reset0
  - 2011 年以降研究が活発化.
  - コード生成における多段階 let 挿入が可能

# アウトライン

- ① 概要
- ② 研究の背景
- ③ 研究の目的**
- ④ 研究の内容
- ⑤ まとめと今後の課題

# 研究の目的

## 表現力と安全性を兼ね備えたコード生成言語の構築

- 表現力: 多段階 `let` 挿入, メモ化等の技法を表現
- 安全性: 生成されるコードの一定の性質を静的に検査



# 研究の目的

## 表現力と安全性を兼ね備えたコード生成言語の構築

- 表現力: 多段階 `let` 挿入, メモ化等の技法を表現
- 安全性: 生成されるコードの一定の性質を静的に検査

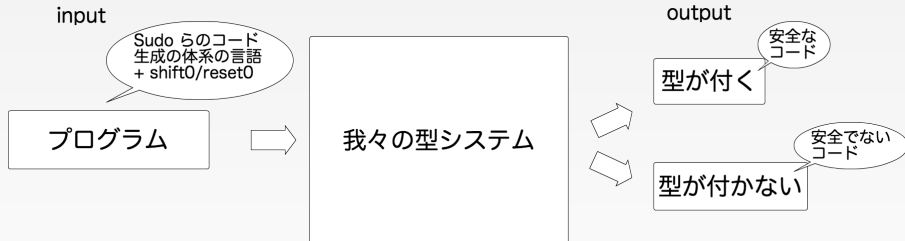
## 本研究: 簡潔で強力なコントロールオペレータに基づくコード生成体系の構築

- コントロールオペレータ `shift0/reset0` を利用し, `let` 挿入などのコード生成技法を表現
- 型システムを構築して型安全性を保証

# アウトライン

- ① 概要
- ② 研究の背景
- ③ 研究の目的
- ④ 研究の内容**
- ⑤ まとめと今後の課題

# 本研究の手法



## コード生成前

```
cfor  $i = 0$  to  $n$  in  
  cfor  $j = 0$  to  $m$  in  
    clet  $y = t$  in  
       $(a[i][j] = b[i] + y)$ 
```

## コード生成前

```
reset0 cfor  $i = 0$  to  $n$  in  
  reset0 cfor  $j = 0$  to  $m$  in  
    shift0  $k_2 \rightarrow$  shift0  $k_1 \rightarrow$  clet  $y = t$  in  
      throw  $k_1$  (throw  $k_2$  ( $a[i][j] = b[i] + y$ ))
```

# shift0/reset0 による多段階 let 挿入

## コード生成前

```
reset0 cfor  $i = 0$  to  $n$  in  
  reset0 cfor  $j = 0$  to  $m$  in  
    shift0  $k_2 \rightarrow$  shift0  $k_1 \rightarrow$  clet  $y = t$  in  
      throw  $k_1$  (throw  $k_2$  ( $a[\underline{i}][\underline{j}] = b[\underline{i}] + y$ ))
```

```
 $k_1 =$  cfor  $i = 0$  to  $n$  in  
 $k_2 =$  cfor  $j = 0$  to  $m$  in
```

## コード生成前

clet  $y = t$  in  
throw  $k_1$  (throw  $k_2$  ( $a[\underline{i}][\underline{j}] = b[\underline{i}] + y$ ))

$k_1 =$  cfor  $i = 0$  to  $n$  in

$k_2 =$  cfor  $j = 0$  to  $m$  in

## コード生成前

```
clet  $y = t$  in  
  cfor  $i = 0$  to  $n$  in  
    cfor  $j = 0$  to  $m$  in  
       $(a[i][j] = b[i] + y)$ 
```



# 型が付く例 / 付かない例

## コード生成前

```
e = reset0 cfor i = 0 to n in  
    reset0 cfor j = 0 to m in  
        shift0 k2 → shift0 k1 → clet y = t in  
            throw k1 (throw k2 (a[i][j] = b[i] + y))
```

# 型が付く例/付かない例

## コード生成前

$e =$  reset0 cfor  $i = 0$  to  $n$  in  
    reset0 cfor  $j = 0$  to  $m$  in  
        shift0  $k_2 \rightarrow$  shift0  $k_1 \rightarrow$  clet  $y = t$  in  
            throw  $k_1$  (throw  $k_2$  ( $a[\underline{i}][\underline{j}] = b[\underline{i}] + y$ ))

$e \rightsquigarrow^* \text{clet } y = t \text{ in}$   
    cfor  $i = 0$  to  $n$  in  
        cfor  $j = 0$  to  $m$  in  
             $(a[\underline{i}][\underline{j}] = b[\underline{i}] + y)$

# 型が付く例/付かない例

## コード生成前

```
 $e =$  reset0 cfor  $i = 0$  to  $n$  in  
  reset0 cfor  $j = 0$  to  $m$  in  
    shift0  $k_2 \rightarrow$  shift0  $k_1 \rightarrow$  clet  $y = t$  in  
      throw  $k_1$  (throw  $k_2$  ( $a[\underline{i}][\underline{j}] = b[\underline{i}] + y$ ))
```

```
 $e \rightsquigarrow^*$  clet  $y = t$  in  
  cfor  $i = 0$  to  $n$  in  
    cfor  $j = 0$  to  $m$  in  
      ( $a[\underline{i}][\underline{j}] = b[\underline{i}] + y$ )
```

$t = \%7$  のとき  $e$  は型が付く

$t = a[\underline{i}][\underline{j}]$  や  $t = b[\underline{j}]$  のとき  $e$  は型が付かない

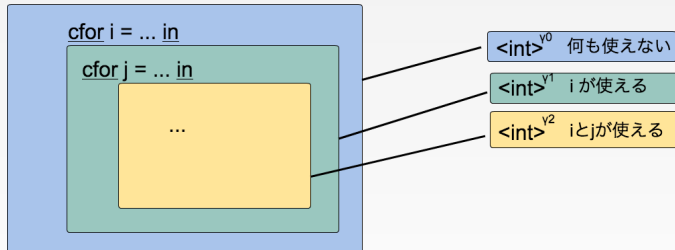
**安全なコードにのみ型をつける  
にはどうすればよいか**

# 環境識別子 EC によるスコープ表現

[Taha+2003] [Sudo+2014]

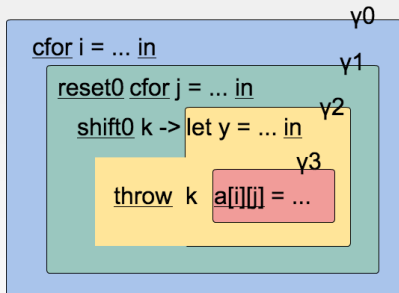
コードレベルの変数スコープ

型によるスコープの表現

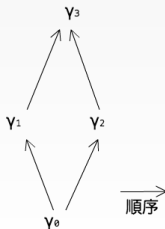
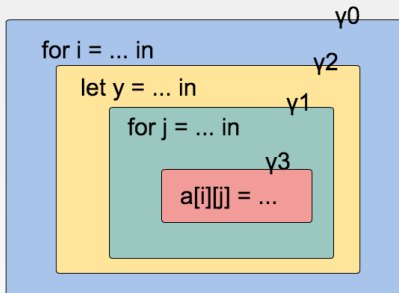


$\gamma_i$ ...Refined Environment Classifier

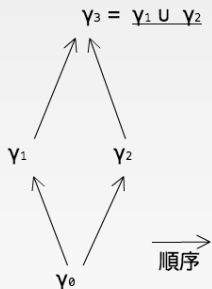
# ECの洗練化（本研究）



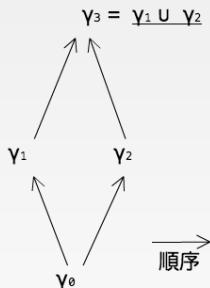
計算  
 $\Rightarrow$



# ECのジョイン



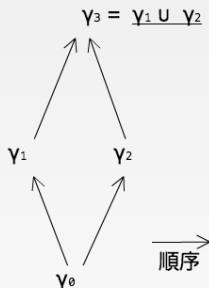
# ECのジョイン



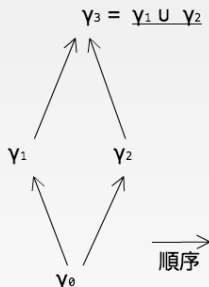
- $\gamma_1$  のコードレベル変数は  $\gamma_2$  では使えない



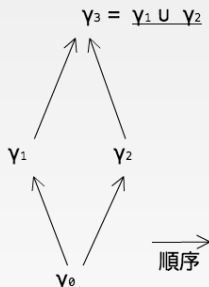
# ECのジョイン



- $\gamma_1$  のコードレベル変数は  $\gamma_2$  では使えない
- $\gamma_2$  のコードレベル変数は  $\gamma_1$  では使えない



- $\gamma_1$  のコードレベル変数は  $\gamma_2$  では使えない
- $\gamma_2$  のコードレベル変数は  $\gamma_1$  では使えない
- $\gamma_1, \gamma_2$  のコードレベル変数は  $\gamma_3$  で使える



- $\gamma_1$  のコードレベル変数は  $\gamma_2$  では使えない
  - $\gamma_2$  のコードレベル変数は  $\gamma_1$  では使えない
  - $\gamma_1, \gamma_2$  のコードレベル変数は  $\gamma_3$  で使える
- ⇒ Sudo らの体系に  $\cup$  を追加

# アウトライン

- ① 概要
- ② 研究の背景
- ③ 研究の目的
- ④ 研究の内容
- ⑤ **まとめと今後の課題**

# まとめと今後の課題

## まとめ

- コード生成言語の型システムに `shift0/reset0` を組み込んだ型システムの設計を行った
- その型システムによって型が付く場合と付かない場合の例をみた

## 今後の課題

- 設計した型システムの健全性の証明 (Subject reduction 等) を行い, 実装を完成させる